

曾良の『旅日記』に於る神と仏とに関する表現

文学研究科国文学専攻博士後期課程満期退学 相澤 泰司

一 はじめに

元禄二年（一六八九）『おくのほそ道』の旅で芭蕉に同行した曾良は、作中で次のように描写されている。

室の八嶋に詣ス。同行曾良が曰、此神ハ木の花さくや姫の神と申て、富士一躰也。無戸室^{ウツ}に入て焼たまふちかひのみに、火出見^{ほでみ}のみことうまれ玉ひしより、室の八嶋と申。又煙を讀習し侍るもこの謂也。將このしろと云魚ヲ禁ズ。縁記の旨、世に傳ふことも侍し。

『おくのほそ道』の最初に記される歌枕の地、室の八嶋（大神神社）の由来について曾良に語らせる描写により、曾良を神道に詳しい人物として紹介することが芭蕉の意図にあったのではないかと指摘される箇所である。曾良はまた『おくのほそ道』の旅に出る際、『延喜式神名帳』から予定経路に該当する神名を抄録している。

曾良は神道家・吉川惟足の門弟であったと言われている。神道家

として見た場合、元禄四年（一六九二）七月十四日・十五日に現在の三重県志摩市磯部町の伊雑宮を訪れた際に、「中臣祓」を講ずるほどではあったことが、曾良の書き残した日記から見て取れるが、神道家としての曾良は客観的には不明な部分が少なくない。

曾良は元禄二年の『おくのほそ道』の旅の二年後に当たる元禄四年、今度は一人で近畿地方を旅しており、二度の旅を通じて、それぞれ『随行日記』・『近畿巡遊日記』と一般的に呼ばれる日記を残している。（以下本稿では併せて『旅日記』と呼ぶ。）曾良は実に多くの神社仏閣を訪れているが、その時にどのような表現を用いているかを見てみることで、曾良の神や仏などに対する、言わば主観的な内的な態度を読み取ることができるのではないだろうか。

本稿では以下、『旅日記』に於て神社仏閣を訪れている際の描写、就中その敬語表現について調べることで、曾良の神や仏に対する心的・内的な態度の違いを考える。

二 『旅日記』中の神仏待遇表現の差

曾良の『旅日記』には、次のような箇所がある。

○「藤森ヲ拝ム。黄檗、高照寺、平等院等ヲ見テ」(元禄四年三月二十六日。藤森は京都府伏見区の藤森神社、黄檗は宇治の黄檗山萬福寺。高照寺は仏徳山興聖寺かと考えられる。)

○「明神拜。大和社參。三輪拜ス。泊瀬見終テ」(元禄四年三月二十八日。明神は石上神宮、大和社は大和神社、三輪は大神神社、泊瀬は長谷寺を指す。)

○「廣峯ヲ拜。増井ヲ見」(元禄四年四月二十五日。廣峯は姫路市の廣峯神社、増井は増井山隨願寺。)

○「野、宮ヲ拜ム。天龍寺、法輪寺、臨川寺、鹿王院ヲ見テ」(元禄四年五月八日。野々宮は嵯峨野の野々宮神社。鹿王院は覚雄山大福田宝幢禪寺でいずれも嵯峨にある寺。)

○「同御旅ヲ拜テ、シヤカ堂ヲ見テ、天満宮ヲ拜シテ」(元禄四年六月十日。同御旅は京都の今宮神社御旅所。シヤカ堂は言わゆる千本釈迦堂。天満宮は北野天満宮。)

○「立田へ詣、法隆寺ヲ見テ」(元禄四年七月九日。立田は奈良の立田神社。)

これらはいずれも、神社に対しては敬意表現になっており、一方その隣接箇所ですらに対しては敬意表現になっておらず、単純に「見」の語を用いている。そのため両者への使い分けがかなり明瞭

になっている箇所であり目を引く。

このように曾良が神と仏とに対して敬意表現の有無を使い分けしていることは、既に上野洋三氏の論考「旅日記の曾良」により次のように指摘されている。(一)「寺院仏閣は『見・見テ通ル・見物・寄宿』などと記され、これに対して神社・神宮は『拝・詣・参』などと記述される。それが原則である。」

上野氏の論考では紙面の関係上、その具体的事例を全て列挙することを控えているが、本稿では可能な限り一覧することでその全体像を示しつつ、若干の再検討を加えたいと思う。(二)

三 『旅日記』中の「参」及びその熟語

右の上野氏の指摘にもあるように、まず考察を進めるに当たって特に注目したのは「参」、「拜」、「詣」の文字である。またこの字を含む熟語である「拜見」、「参詣」についても取り上げる(三)。なお現在よく用いられている「参拝」の語は確認できなかった。

まず「参」及び、それを含む熟語について取り上げる。(四)熟語である「参詣」の方から先に例を見てみる。全部で十七例ある。年次順に掲出した。

番号	年月日	原文	対象	種別
一	二・四・十三	八幡へ参詣	金丸八幡	神
二	二・四・十九	湯泉へ参詣	温泉神社	神
三	二・四・二十一	二所ノ関ノ名有ノ由、宿ノ主申ニ依テ参詣	関所明神	神
四	二・四・二十一	関山へ参詣	関山(満願寺)	仏
五	二・四・二十一	本堂参詣	関山(満願寺)	仏
六	二・四・二十八	十念寺、訪明神へ参詣	諏訪明神	神
七	二・四・二十九	大元明王へ参詣	大元明王(神宮寺の泰平寺・現田村神社)	仏
八	二・五・十	住吉ノ社参詣	石卷住吉社(大鳥神社)	神
九	二・五・二十九	黒瀧へ被参詣	黒瀧山向川寺	仏
十	二・七・一	泰叟院へ参詣	元来浄念寺(榊原家菩提寺)	仏
十一	二・七・一	乙宝寺参詣	乙宝寺	仏
十二	二・七・三	明神へ参詣	弥彦神社	神
十三	二・八・九	氣比へ参詣	氣比神社	神
十四	二・八・十三	多賀へ参詣	多賀神社	神
十五	四・三・十一	アツタ参詣	熱田神宮	神
十六	四・四・十八	日前宮へ参詣	日前宮	神
十七	四・五・二十五	北野へ参詣	北野天満宮	神

全十七例中、その多くが神社に対して用いられているが、仏寺に対して用いられた例も皆無ではないと判る。しかし十七例中五例、四と五の関山満願寺の記事を一つと数えたと十六例中四例と、割合は1/4になる。これを多いと見るか少ないと見るかは論の分かれる所かもしれないが、やはり神社に対してより多く用いられていることは明らかである。

また元禄四年よりも元禄二年に多く用いられている点が特徴的である。これについて上野氏は「元禄二年の旅日記では、(中略)日記の全体量にくらべて、社寺に関する記録の量があまり多くな、また、その数少ない記録の中に、右の原則に対する例外が少なからず見られるので、一概に結論を導くことは困難である」としている。^{五)} 「右の原則」とは言うまでもなく神社に対して待遇表現を用いている点である。

確かに関山満願寺、向川寺、乙宝寺に対して「参詣」の語を用いている理由は定かではない。しかし元禄二年七月一日に訪れている泰叟院(浄念寺)は別に考えた方がよいだろう。泰叟院は村上にある榊原家の菩提寺である。ここには曾良が長島藩士時代に仕えていた松平良尚の息に当たる一燈公の墓があり、これも後に述べるように、その墓を曾良は「拜」しているのである。この寺が曾良にとっては特別な敬意を払うべき場所であったことは明らかで、ここで「参詣」の語を用いていることは不自然ではないと考える。

次に「参」の語、及び「参」を含む「参詣」以外の熟語について取り上げる。「参詣」同様、年次順に掲出した。

番号	年月日	本文	対象	種別
一	四・三・二十八	大和社参	大和神社	神
二	四・四・四	丹生へ社参	丹生神社下社か	神
三	四・四・十一	本宮へ着 尾崎 宿ヲ借 直ニ湯へ 行 帰参宮	熊野本宮大社	神
四	四・四・十九	槇ノ尾ニ参	槇尾山施福寺	仏
五	四・四・十九	シノ田ノ森明神へ 参ル	聖神社（信太社）	神
六	四・四・十九	大鳥明、（明神） へ参	大鳥神社	神
七	四・五・十八	奥ノ御前ニ参	貴船神社奥宮	神
八	四・五・十八	鞍馬本堂ニ参	鞍馬寺本堂	仏
九	四・五・二十三	誓願寺 和泉式部 か塚 梅ヲ 六角堂 参テ	六角堂（紫雲山頂法寺）	仏
十	四・七・十三	下宮ヨリ参宮	伊勢神宮外宮	神
十一	四・七・十三	大年ノ宮へ参ル	大歳宮（佐美長神社）	神
十二	四・七・十六	内宮 宮共再参ス	伊勢神宮内宮外宮	神
十三	二・九・十三	内宮参宮	伊勢神宮内宮	神

このうち、一と二は「社参」の語となっている。また三、十、十三は「参宮」の語句になっており、十二は「再参」の語句として用いられている。

「参ル」と送り仮名を振っている場合もあることから、読み方としては漢字一文字の場合でも「参る」と訓む意識だったと思われる。「参詣」とは逆に、元禄四年の記述に多く、元禄二年には「参ル」単独の形では用いられていないようである。

三は熊野本宮であるが、十、十三ともに伊勢神宮に対して用いられている。現代でも「参宮」と言った場合には、「伊勢」という語と結び付きやすい傾向にあるかと思う。既に曾良（或いは同時代人）にも同様の意識があったのではないかと推測される。また熊野本宮も、その名に「本宮」と「宮」の字を含んでいることから「参宮」の語が思い浮かびやすかったであろうことは想像がつくし、歴史上重要な位置付けを占めてきたことを考え合わせると、「参宮」の語を用いていることも、さほど不自然とは考えられない。

但し伊勢神宮に対しては「参宮」の語しか用いられていないわけではなく、元禄二年九月十四日では「外宮へ詣」、前日の十三日には「遷宮拜」と記している。

ここでも全十三例中、十例が神社に対して用いられており、やはり「参」の語は専ら神に対する語であったことが分る。しかし「参詣」と同様、ここでも仏寺に対して用いられた例が存在する。同様にその理由は未詳である。

また、ここまで「参」の語と、それを含む語句の使われ方についてみてきたが、「参」の字は、「参詣」をはじめとして「社参」「参宮」のように熟語として用いられることが多く、「参」の字が「参(る)」の様に単独で用いられることは比較的少ないとも言える。

なお、ここからは除外したが、「持参」の語は現代と同義で複数回用いられている。また元禄二年五月一日の条には「神尾氏ヲ尋三月廿九日、江戸へ被参由ニテ」という例があり、これも除外している。

四 『旅日記』中の「詣」

「詣」の字は十三例あり、右の三で述べた「参詣」以外では、熟語として用いられている例は見出せなかった。同じく年次順に掲出する。

「詣」の字のみで記述している場合もあるが、「参」同様、これも「詣テ」と記している箇所もあることを見ると、曾良の意識としては「詣」で「まうづ」だったのだろう。

番号	年月日	本文	対象	種別
一	二・五・六	亀が岡八幡へ詣。	亀ヶ岡八幡	神
二	二・五・七	つゝじが岡ノ天神へ詣、	榴岡天神	神

三	二・五・九	瑞岩寺詣、	瑞巖寺	仏
四	二・六・五	羽黒ノ神前二詣。	羽黒権現(現出羽神社)	神
五	二・七・二十五	多田八幡へ詣テ、	多田神社	神
六	二・七・二十七	所ノ諏訪宮祭ノ由聞テ詣。	諏訪神社(現菟橋神社)	神
七	二・八・十四	別龍靈社へ詣。	別龍靈社(南宮大社撰社)	神
八	二・九・十四	外宮へ詣。	伊勢神宮外宮	神
九	二・九・十四	岩戸月夜見ノ森へ詣テ	月夜見宮	神
十	四・四・十二	神蔵へ詣	神倉神社	神
十一	四・六・七	祇園ノ祭ヲ見テ養元へ行ク 饗有社へ詣	八坂神社か	神
十二	四・六・十	東照宮に詣テ	日吉東照宮	神
十三	四・七・三	金剛山峯ニ到申ノ中尅 本社本堂へ詣	金剛山頂の葛木神社と転法輪寺か	列挙
十四	四・七・九	立田へ詣	竜田神社	神
十五	四・七・十六	月夜見へ詣テ	月夜見宮	神

種別欄に「列挙」とあるのは、訪れた対象をまとめて記している場合である。以下の他例でも同様だが、中には神仏の種別を考える際には判断しにくい場合もある。

使用例数としては元禄二年の方が四年に比べてやや多いが、「参詣」や「参」のような極端な偏りは見られない。

「詣」は、十三の金剛山での列挙を別にすれば、三の瑞巖寺を除いて全て神社に対してだけ用いられている。十三については、直前の語は「本堂」を受けているので仏教関連と考えられるかもしれないが、金剛峯寺は修験の地として知られているように、神仏習合色がかなり強いので判断に迷う所である。四の羽黒権現、また十二大津の日吉東照宮も同様である。なお東照宮に対する表現については次に述べる。

しかしそれでも、「参」と同じ様に多くが神社に対して用いられていることは明かであろう。

五 『旅日記』中の「拝」及びその熟語

まず熟語「拝見」についてみると、次の一語のみだった。

年月日	原文	対象	種別
二・四・一	御宮拝見。	日光東照宮	神

東照宮および関連する記述が登場するのは、ここ元禄二年の日光のほかには、続く同年五月七日宮城野の東照宮、そして元禄四年四月十七日和歌山東照宮とその例大祭、そして右に述べた同年六月十

日・大津の日吉東照宮の記事である。いずれの三か所も、後に例示するように、宮城野の東照宮には「拝」、和歌山の東照宮とその例大祭にはそれぞれ「到」と「行く」^(六)と「拝」、日吉東照宮には「詣」のみの文字が用いられており、ここ日光東照宮とは表現が異なっている。

現代では「拝見」という語は日常語としてやや卑近な印象があるが、この「拝見」という語が、「本来の」東照宮である日光東照宮だけに用いられていることは、注意してよいかもしれない。なお『おくのほそ道』では「詣拝」という、曾良が使っておらず、なおかつやや見慣れない語を芭蕉が用いている点にも注意を引かれる。

次に「拝」字について見る。用例数は五九となり、「参」「拝」「詣」の三字のうちでは最も用例数が多いため、別表として掲出す。この表では、種別ごとにまとめた上で、年次順に掲載した。以下、別表として掲載するものは、この形を取っている。

「拝」は漢字一文字のみで記している場合が多いが、「拝ム」「拝ス」と送り仮名を付けている場合もあり、その音訓については特段の違いは無いようだ。

ここでもやはり仏寺よりは神社に対して、より多く用いられていることが明白であろう。仏教関連に対して用いられているのは、7不動明王図、8大元明王図、34宝積寺の例のみである。このうち7と8とは、ともに同じ現田村神社所蔵宝物である。宝積寺に対して

「拝」が用いられている理由は、従前同様不明である。

8 宮城野の東照宮、24 和歌山東照宮例大祭に「拝」が用いられていること、19 伊勢遷宮、および11「一燈公」こと榊原良兼の墓に対して「拝」の字が用いられていることは前述の通りである。

「拝」の使われ方では、「参」「詣」に見られなかった対象もある。26では百舌鳥神社と併せて天皇陵に対して用いられている。

そして「拝」は古人やそれまつわる品々に対して用いられている点も、「参」とは異なる点である。

1・2の那須与一に関する宝物、4 庄司戻し跡にある義経伝説にまつわる器や、12 弘智法印像、15 木曾義仲に関する宝物、29 楠木正成墓、41 西行・平康頼・頼阿の供養塔、52 元政上人の墓、55 討死した藤堂家家臣の墓である。

このうち12 弘智法印像は或いは仏教関連と考えられるかもしれないが、41は西行・平康頼・頼阿の供養塔に先立って寺院名も列挙されているので、同様に仏教関連と捉えられる一方、古人の範疇に入れた方が「拝」の字の使われ方の特徴を考える意味では妥当かもしれない。そう考えると、右述の不動明王図と大元明王図も「金岡がカケル不動拜ス。探幽が大元明王ヲ拜ム」と記されていることから、不動明王や大元明王よりも、巨瀬金岡や狩野探幽を意識しての表現である可能性も捨て切れない。

4 源義経、15 木曾義仲、55 藤堂家家臣は、芭蕉との関連を考える興味深い。尤も源義経や木曾義仲に対する親近感には芭蕉だけに止

まらず、より一般的なものだったのかもしれない。55 藤堂家家臣について上野氏は「神社以外の所をも「拜ム」ことはあるのであり」の例の一つとして挙げるにとどめている。しかし、芭蕉が若い頃に仕えていた藤堂家家臣の墓に対して、もともと藤堂家とは全く縁のない曾良が、「拝」という字を以って表現しているのは、師に当たる芭蕉を意識したことだと考えてもよいのではないか。

以上、「参詣」「参」「詣」「拝」の四種類の敬意表現についてみてきた。それぞれの中での使い分けについては、若干不明な点はあるものの、多くが神社に対して用いられていることは明かであろう。しかしながら、それぞれの語の使い分けや差違については、明確ではないと言わざるを得ないが、何点かは指摘できよう。すなわち四語の中では「拝」が最も多用されている点、「参詣」は元禄二年に「参（まいる）」は元禄四年に多い点、「詣」「拝」は元禄二年と四年との使用数には大きな偏りは無い点である。

六 『旅日記』中の仏教関連について用いられる文字

次に仏寺に対してはどのような語が用いられているかについて考察する。それらが敬意を伴わない表現であることは、これまでから容易に想像がつく。神社仏閣に対して「参らない」「詣でない」に該当する表現としては、「見る」や「行く」がまず思い浮かぶ。ま

た東照宮についてふれた時にも、「到」の文字が使われていることは既に述べた。

以下では「見」、「行・往」、「至・到」、「趣」^七、「尋」の文字の使われ方について考察してみる。

これらの文字は孰れも使用例が多かったため、全て別表の形で末尾に掲出した。

このうち使用頻度が最も高いのは「見」の語である。「見物」という熟語の例も五例見受けられる。

当然ながら「見」の語は神仏に限らず、用いられる対象は広範囲に渡っている。種別項目での分類は恣意性を免れ得ないが、おおよその目安にはなると思う。

既に「参」「詣」「拜」も仏教関連に用いられている例が少数ながら存在した。「見」について、神仏に関し比較する形で見てみると、逆に神道関連に対してよりも仏教関連に対して用いられている場合が多い。仏教関連に対して用いられることが最も多い語と結論づけられよう。神道関連で用いられている場合は競馬や御輿（洗い・渡御）などの神事が多いと考えられる。

また古人に関するものとしては、右に「拜」の箇所述べたこととの関連からすると、佐藤忠信の石塔に対して「見」とあるのは、芭蕉が『おくのほそ道』の飯塚（飯坂）の章段で、佐藤継信・忠信兄弟の二人の妻の故事に触れ、「袂をぬらし」ていることを思い合わせると、やや意外の感、無きにしも非ずである。この京都に在る

忠信石塔を曾良が訪れているのは元禄四年であつて、既に芭蕉と旅して飯塚を訪れた後であるだけに尚更そう思われる。

「行」「往」に関して、両字の使い方については特に違いは無いようである。その字の意味上、当然ながら（別表の「種別」の項目では「道程」とした）移動する動作や行動自体について説明する場合や、地名とともに用いられる例が多い。

仏寺に対して用いられる場合もあり、これは不自然ではない。一方ここでもまた神社に対しても用いられている。そのうち室の八嶋は、あるいは歌枕として考えてもよいかもしれない。また北野天満宮が五回と少なくない回数登場している。但しこれは曾良が京都滞在時に北野天満宮か、その近隣の、おそらくはその神人の居宅を拠点の一つとして使っていた可能性が考えられることからすると、神仏に対する表現の比較対象として数えるのは相応しくないかもしれない^八。

「至」「到」も両字の差違は認められないようだ。特に語の性質上、目的地を伴うことがふつうであるため、種別で仮に「地名」と分類した種類の語と共に用いられている場合が大部分である。

神仏いずれに対しても用いられているが、その例は少数である。神道関連に用いられている例を見ると、南宮大社は「南宮ニ至テ拜ス」、貴船神社も「木船ニ至ル 十町斗前ニ蛭岩有 本社ヲ拜テ」と、共に結果的に「拜」していることから単に場所として意識していたとも見ることが出来る。羽黒山本坊は、そもそも修験の神仏習

合の地であるし、続く件を見ると「蕎切、茶、酒ナド出」とあるように、宗教の地としてよりは宿舎や休憩所の意識で捉えられているように思われる。

「趣」の字も「行」「往」や「至」「到」と同様の性質を持つと考えられ、やはり地名を伴って用いられる場合が多いが、前二者（或いは四者）に比べると、十三例と比較的神社に対して用いられる傾向があるようだ。その理由については詳らかにし得ないが、前述の通り内五例が北野天満宮に対してのものであることは重ねて指摘しておく。

「尋」の字の用いられ方の特徴は、その殆んどが人名に対してであることだろう。唯一神社に対して用いられている園韓神社は、結果的に行くことも至ることも参ることも詣づることも拜することもあることだろう。この場合には「尋」の字くらいしか用いようがないとも考えられる。「探」の字も思い浮かぶが使用例は見付けられなかった。

また仏教関連に対しても用いられている二例の本福寺と大智院については、仏寺としてよりは拠点あるいは人物を訪ねたと考えた方がよいだろう。この本福寺は天津長等の本福寺を指し、蕉門の千那が護持していた。曾良は仏寺を訪ねたのではなく、千那を訪問したと考える方が自然であろう。また大智院は伊勢長島にあり、曾良のおじが住職を務めていたとも言われる。幼少期から過ごし長島藩に仕えることになった曾良にとっては事実上の故郷であり、たびたび

ここに滞在しているからである。

七 結語

以上、曾良の『旅日記』で神と仏とに関して、曾良がどのような語句を用いているかの別を考察した。その使い分けは完全なものではなく、仏教関連に敬意表現を用いている理由、逆に神道に関連に敬意表現を用いていない理由については、明確な理由は見出せなかった。或いはそもそも人の書くものはそのように統一のとれたものではないのであって、理由は見出せないかもしれないが、今後も留意してゆきたいと考えている。

しかし神道に関連して敬意表現をかなり多く用いていることは、その用例によって明らかにし得たと考える。その表現と意識とに於て、曾良が神道家であることをあらためて示せたのではないかと思う。

表「拜」

番号	年月日	本文	対象	種別
1	元禄2・4・19	温泉大明神ノ相殿ニ八幡宮ヲ移シ奉テ、兩神一方	温泉神社・八幡宮	神
2	元禄2・4・23	八幡ヲ拜	八幡宮	神
3	元禄2・5・7	権現宮を拜	東照宮(宮城野)	神
4	元禄2・5・9	塩竈明神ヲ拜	塩竈明神	神
5	元禄2・6・6	御室ヲ拜シテ	月山権現	神
6	元禄2・7・11	居多ヲ拜	居多神社	神
7	元禄2・7・15	埴生八幡ヲ拜ス	埴生八幡	神
8	元禄2・8・6	菅生石(敷地ト云)天神拜	菅生石部神社	神
9	元禄2・8・14	南宮ニ至テ拜ス	南宮大社	神
10	元禄2・9・12	大ノ拜	太々神楽(伊勢山田)	神
11	元禄2・9・13	遷宮拜	伊勢神宮内宮遷宮	神
12	元禄2・10・8	天神ヲ拜	伊賀上野天満宮	神
13	元禄4・3・26	藤森ヲ拜ム	藤森神社	神
14	元禄4・3・28	明神拜	石上神宮	神
15	元禄4・3・28	三輪拜ス	大神神社	神
16	元禄4・4・17	御祭ヲ拜ム	和歌山東照宮例祭	神
17	元禄4・4・17	カタニ至テ明神ヲ拜	加太淡嶋神社	神
18	元禄4・4・25	廣峯ヲ拜	広峰神社	神
19	元禄4・4・26	長田明ノ(明神)ヲ拜	長田神社	神
20	元禄4・4・27	生田ヲ拜	生田神社	神
21	元禄4・4・27	西宮ヲ拜テ	西宮神社	神
22	元禄4・4・28	廣田ヲ拜	広田神社	神
23	元禄4・4・28	八幡拜	離宮八幡	神
24	元禄4・5・1	賀茂へ趣 神前ヲ拜ス	上賀茂神社か	神
25	元禄4・5・6	下賀茂ヲ拜テ	下鴨神社	神
26	元禄4・5・6	吉田ヲ拜	吉田神社	神
27	元禄4・5・8	野ノ宮ヲ拜ム	野々宮神社	神
28	元禄4・5・10	同御旅ヲ拜テ	今宮神社	神
29	元禄4・5・10	天満宮ヲ拜シテ	北野天満宮	神
30	元禄4・5・18	岩本 神前へ向へハ右山寄 北向 後川也 橋本 神前へ向へハ左楠 石橋ノツメ也 拜テ	岩本社・橋本社(上賀茂神社 撰社)	神
31	元禄4・5・18	本社ヲ拜テ	貴船神社	神
32	元禄4・5・18	鞆ノ明神ヲ拜	由岐神社(鞍馬寺境内)	神
33	元禄4・6・10	山王ヲ拜	日吉神社(比叡山東麓)	神
34	元禄4・6・11	八幡ヲ拜	近津尾神社	神
35	元禄4・6・14	新玉津嶋 五条天神ヲ拜	五条天神	神
36	元禄4・6・14	西高辻ノ住吉ヲ拜テ	住吉神社(西高辻)	神
37	元禄4・6・18	新熊野権現ヲ拜	新熊野権現	神
38	元禄4・7・1	いなりヲ拜ス	玉造稻荷神社か	神
39	元禄4・7・2	平岡ヲ拜	枚岡神社	神
40	元禄4・7・2	コンタ宮ヲ拜	誉田八幡宮	神
41	元禄4・7・3	水分社ヲ拜	建水分神社	神
42	元禄4・7・9	本宮ヲ拜ス	菟田大社	神
43	元禄4・7・9	廣瀬明神ヲ拜テ	広瀬明神	神
44	元禄2・4・19	宝物ヲ拜	温泉神社宝物	神(古人)
45	元禄2・4・19	与一扇ノ的 ~正一位ノ宣旨、縁起等拜ム	温泉神社宝物	神(古人)
46	元禄4・6・11	勸学院 本堂 三井水鐘 慈證大師ノ墓 新羅明神ヲ拜ミ	新羅善神堂(三井寺北院)	神(列挙)
47	元禄4・4・20	百舌耳野ノ八幡并陵ヲ拜	百舌鳥神社・伝仁徳陵	神・陵墓
48	元禄2・4・20	庄司モドシト云テ~判官ヲ送リテ、是ヨリモドリシ酒盛ノ跡也。土中古土器有。奇妙ニ拜	源義経(酒盛りの跡の土器)	古人
49	元禄2・6・29	一燈公ノ御墓拜	榊原良兼墓	古人
50	元禄2・7・4	弘智法印像ヲ拜	弘智法印像(即身成仏)	古人
51	元禄2・7・25	真(実)盛が甲冑、木曾願書ヲ拜	木曾義仲書	古人
52	元禄4・4・27	正成か塚ヲ拜	楠正成墓碑	古人
53	元禄4・6・18	瑞光寺 元政ノ墓ヲ拜ム	元政上人	古人
54	元禄4・7・2	藤堂家打死六人ノイハイヲ拜	藤堂家家臣碑	古人
55	元禄4・5・14	目病地蔵 祇園 長楽寺 双林寺 国阿上人 西行 平判官 頓阿之墓拜	西行・平康頼・頓阿の供養塔	古人(列挙)
56	元禄2・4・29	金岡がカケル不動拜ス	不動明王図	仏
57	元禄2・4・29	探幽が大元明王ヲ拜ム	大元明王像	仏
58	元禄4・4・28	宝寺ヲ拜	宝積寺	仏
59	元禄4・6・12	朱雀院ノ陵ヲ拜ム	朱雀天皇陵	陵墓

表「見」 その1

番号	年月日	本文	対象	種別
1	元禄4・6・14	建仁寺 六道ノエンマ堂 安井 高臺寺 六原蜜寺 清盛ノ像有 見テ	建仁寺ほかの寺院・六波羅蜜寺・平清盛像	仏・古人
2	元禄4・4・27	和田 清盛ノ石塔 里内裏 小松原 本間 遠矢ノ場 和田御崎 深崎山 来迎寺ヲ見テ	和田神社(推定)ほか～・来迎寺	仏・景(列举)
3	元禄2・5・13	高館、衣川、衣ノ関、中尊寺、光堂(金色寺、別當案内)、泉城、さくら川、さくら山、秀平やしき等ヲ見ル	高館、衣川、衣ノ関、中尊寺、金色寺、、泉が城、桜川、さくら山(諸説あり)、秀平屋敷等	仏(列举)
4	元禄4・4・20	妙国寺 薬師堂ノ藤 エヒス嶋 大寺ノ開帳ヲ見テ	大念仏寺開帳	仏(列举)
5	元禄4・4・29	関戸ノ院 車路 関明神 宗鑑屋敷 利休カコヒ 天神ノ腰カケ石 薬師堂 貫之船ツナキ柳 観音寺等ヲ見ル	関戸院ほか～観音寺	仏(列举)
6	元禄4・5・22	開山堂御影 花園法皇御影 子ハンノホリモノ おステ君ノ影 等見テ	妙心寺開山堂御影 花園法皇御影 涅槃の彫り物 秀吉息鶴松の絵姿 方丈等	仏(列举)
7	元禄2・4・5	雲岩寺見物	雲巖寺	仏
8	元禄2・5・9	瑞岩寺詣、残見物	瑞巖寺境内	仏
9	元禄2・5・13	シミン((新御))堂、无量劫院跡見	平泉無量光院	仏
10	元禄2・8・10	日連ノ御影堂ヲ見ル	本隆寺日蓮御影堂	仏
11	元禄2・8・10	西福寺へ寄、見ル	敦賀西福寺	仏
12	元禄4・3・26	黄檗 高照寺 平等院等ヲ見テ	高照寺・平等院等	仏
13	元禄4・3・28	元興寺 紀寺等ヲ見テ	元興寺・紀寺	仏
14	元禄4・3・28	泊瀬 見終テ	長谷寺	仏
15	元禄4・3・29	モンシユ カコ山 橘寺 岡寺等ヲ見テ	橘寺・岡寺	仏
16	元禄4・4・9	高野へ上 不動坂ケハシハ残見物	高野山	仏
17	元禄4・4・20	天王寺ヲ見テ	天王寺	仏
18	元禄4・4・24	書写山ヲ見ル	書写山	仏
19	元禄4・4・25	増井ヲ見	増井山隨願寺	仏
20	元禄4・4・26	月浦山無量寿寺ヲ見ル	無量光寺	仏
21	元禄4・4・29	壬生見テ	壬生寺	仏
22	元禄4・5・2	妙心寺ヲ見テ	妙心寺	仏
23	元禄4・5・6	百万遍ヲ見テ	百万遍	仏
24	元禄4・5・6	銀閣寺 鹿谷ノ寺見テ	銀閣寺・鹿谷の寺々か	仏
25	元禄4・5・6	高雲寺 若王寺 南禅寺ヲ見テ	高雲寺・若王子・南禅寺	仏
26	元禄4・5・8	大門ノ御所ヲ見テ	大覚寺	仏
27	元禄4・5・8	天龍寺 法輪寺 臨川寺 鹿王院ヲ見テ	天龍寺・法輪寺・臨川寺・鹿王院	仏
28	元禄4・5・8	太秦へ行テ見ル	太秦(広隆寺)	仏
29	元禄4・5・8	法金剛寺ヲ見テ	法金剛寺	仏
30	元禄4・5・10	シヤカ堂ヲ見テ	千本釈迦堂	仏
31	元禄4・5・17	講堂ヲ見テ	行願寺(草堂)	仏
32	元禄4・5・18	右ハ松ヶ崎ノ寺見ル	「松ヶ崎ノ寺」	仏
33	元禄4・5・22	鹿苑寺ノ金閣ヲ見ル	金閣寺	仏
34	元禄4・5・24	蓮臺寺 磐舟寺ヲ見テ	蓮臺寺・磐舟寺	仏
35	元禄4・6・10	横川ヲ見テ	横川(延暦寺)	仏
36	元禄4・6・10	黒谷ヲ見	黒谷(延暦寺)	仏
37	元禄4・6・10	東塔 戒ダン 講堂 根本中堂 盡ク見テ	東塔・戒壇・講堂・根本中堂(延暦寺)	仏
38	元禄4・6・11	石山井宝塔院ノ額ヲ見ル	石山寺・宝塔院額	仏
39	元禄4・6・12	下ノタイコヲ見テ	醍醐寺	仏
40	元禄4・6・12	北花山寺ヲ見ル	北花山寺	仏
41	元禄4・6・12	清閑寺ヲ見テ	清閑寺	仏
42	元禄4・6・17	東向ノ観音開帳を折と行テ見ル	東向観音開帳	仏
43	元禄4・6・18	大忠庵 遊行寺 東本願寺廟所 開山ノ学問所ノ岩屋 鳥?等見テ	大忠庵・遊行寺・東本願寺廟所・開山学問所岩屋・鳥辺野等	仏
44	元禄4・6・18	センノウ寺観音ヲ見テ	善能寺観音	仏
45	元禄4・6・18	万寿寺ヲ見テ	万寿寺	仏
46	元禄4・6・18	法堂 佛壇(タン) 方丈 僧堂 センチン込見	東福寺境内か	仏
47	元禄4・6・18	安樂行院 誓願寺 隠居所 後深草院 勅願所ノ由 等ヲ見テ	安樂行院・誓願寺・隠居所(未詳)	仏
48	元禄4・7・1	国分寺ヲ見テ	大阪天王寺の国分寺	仏
49	元禄4・7・2	八尾地藏堂ヲ見ル	初日山常光寺	仏
50	元禄4・7・2	久宝寺 太子ヲ見テ	椋樹山大聖勝軍寺	仏
51	元禄4・7・2	藤井寺ヲ見ル	葛井寺	仏
52	元禄4・7・5	山上ニ到 先本堂ヲ見	大峯山寺本堂	仏
53	元禄4・7・8	久米寺見ユル	久米寺	仏
54	元禄4・7・9	タルマ開帳 名ノ所ヲ見ル	達磨寺近辺の名所(詳細未詳)	仏
55	元禄4・7・9	法隆寺ヲ見テ	法隆寺	仏
56	元禄4・7・9	西大寺ヲ見	西大寺	仏

表「見」 その2

番号	年月日	本文	対象	種別
57	元禄4・7・9	法花寺 眉簡寺等見テ	法花寺、眉間寺	仏
58	元禄4・7・10	カサギヘテ寄テ盡ク見ル	笠置寺	仏
59	元禄4・7・9	薬師寺 詔題寺 菅原ノ天神 伏見等ヲ見テ	薬師寺、唐招提寺、奈良菅原神社、伏見(菅原伏見西陵か)	神仏・陵
60	元禄2・5・9	八幡社、五太((大))堂ヲ見	松島八幡社、五大堂	神仏
61	元禄4・5・22	平野 等持寺 妙心寺ヲ見ル	平野(神社)・等持寺・妙心寺	神仏
62	元禄4・5・5	競馬ヲ見テ	競馬	神(神事)
63	元禄4・5・5	馬ヲ見ル	馬	神(神事)
64	元禄2・5・8	塩竈ノかまを見ル	塩竈神社	神
65	元禄2・5・13	月山、白山ヲ見ル	平泉月山神社か、白山社	神
66	元禄4・4・29	吉祥院ヲ見テ	吉祥院(天満宮)	神
67	元禄4・5・5	神輿ノ入ル作法ヲ見ル	御輿作法	神
68	元禄4・5・29	御輿洗見ニ	御輿洗い(八坂神社)	神
69	元禄4・6・7	祇園ノ祭ヲ見テ	八坂神社祇園祭	神
70	元禄4・6・7	御輿(御輿)ノ渡ヲ見ル	御輿渡御(八坂神社祇園祭)	神
71	元禄4・6・14	神輿ノ渡ヲ見ル	御輿(八坂神社祇園祭)	神
72	元禄4・6・18	御霊祭ノ跡ヲ見テ	御口祭の跡(御霊か?未詳)	神
73	元禄4・7・8	ソカノ大臣ノヤシキノ跡ノ社ヲ右ニ見テ	宗我坐宗我都比古神社か。	神
74	元禄2・4・19	殺生石ヲ見ル	殺生石	古跡
75	元禄2・5・8	十符((符))菅、壺碑ヲ見ル。	十符の菅、壺の碑	古跡
76	元禄2・5・9	雄嶋(所ニハ御嶋ト書)所トヲ見ル	雄島	古跡
77	元禄2・5・13	金椀山見ル	金鶏山	古跡
78	元禄2・7・15	クリカラヲ見テ	俱利伽羅峠	古跡
79	元禄4・3・27	南都見終テ	奈良	古跡
80	元禄4・4・19	千枝ノ楠有 下ニホコラ有 庄や座敷ノ庭ノ内也 断云ハ見スル也	信太の森の楠木	古跡
81	元禄4・5・5	城山ヲ尋テ委見ル	伏見山か	古跡
82	元禄4・5・8	獨セウノ庵見テ	獨照庵(=直指庵)	古跡
83	元禄4・5・18	足清岩 僧正谷ヲ見テ	足清岩・僧正谷(貴船辺)	古跡
84	元禄4・6・29	松虫ツカ チヤウス山 万代カ池等ヲ見ル	松虫塚・茶臼山・万代が池	古跡
85	元禄4・7・1	真田カ出丸ヲ見テ	真田丸	古跡
86	元禄4・7・3	チハヤノ城 ナカモジ赤坂城霧山ノ城其外所ト ヲ見テ	千早城、ナカモジ(未詳)、赤坂城、桐山	古跡
87	元禄4・7・8	染井等盡見テ	染井(当麻染野の石光寺境内)	古跡
88	元禄4・4・26	入道ノ石塔ヲ見ル	平清盛供養塔	古人
89	元禄4・4・27	景時カ二度ノ懸ノ場見テ	梶原景時史跡	古人
90	元禄4・5・5	戀塚ヲ見テ	恋塚(文覚上人ゆかり袈裟御前墓)か	古人
91	元禄4・6・1	一条寺 文山之旧庵ヲ見テ	石川文山旧庵	古人
92	元禄4・6・10	女院 アハノ内侍ノ像ヲ見ル	阿波内侍像	古人
93	元禄4・6・10	女院ノ廟ヲ不見	建礼門院陵	古人
94	元禄4・6・12	山村遍照ヲ見ル	僧正遍照塚	古人
95	元禄4・6・18	忠信ノ石塔を見ル	佐藤忠信石塔	古人
96	元禄4・6・18	豊国山王宮?見テ	豊国山王宮(当時廢墟か?)	古人
97	元禄2・4・2	ウラ見ノ瀧、ガンマンガ洲見巡	裏見の滝、含満ヶ淵	景
98	元禄2・4・29	石河瀧見ニ行	石河瀧	景
99	元禄2・5・4	折と日ノ光見ル	日の光	景
100	元禄2・5・4	三ノ輪、笠嶋と村並而有由、行過テ不見	箕輪、笠島	景
101	元禄2・5・7	玉田、横野を見、	玉田、横野	景
102	元禄2・5・9	千賀ノ浦、籬嶋、都嶋等所ト見テ	千賀の浦、籬島、都島	景
103	元禄2・5・9	トミ山モ見ユル	宮城の富山	景
104	元禄2・5・10	石ノ巻中不殘見ゆル	石巻	景
105	元禄2・5・13	霧山(泉城ヨリ西)見ゆルト云ドモ見ヘズ	平泉霧山	景
106	元禄2・6・18	鳥海山ノ晴嵐ヲ見ル	鳥海山の晴嵐	景
107	元禄2・6・27	湯本へ立寄、見物シテ	温海温泉湯本	景
108	元禄2・7・28	薬師堂等ノ外町邊ヲ見ル	町の辺り	景
109	元禄2・8・3	山中故、月不得見	月	景
110	元禄2・8・7	三国見ユル	福井三国	景
111	元禄2・8・8	黒丸見ワダシテ	福井黒丸	景
112	元禄4・3・24	御室ノ花ヲ見ル	御室の花	景
113	元禄4・3・28	藤原等ヲハルカニ見ル	奈良藤原町	景
114	元禄4・4・1	吉野委廻見	吉野	景
115	元禄4・4・13	那智ノ瀧ヲ見ル	那智の滝	景
116	元禄4・4・17	風景ヲ見テ	加太の風景	景
117	元禄4・4・19	捨身タケヲ見ル	捨身嶽	景
118	元禄4・4・27	夢野ヲ遠見	夢野	景
119	元禄4・4・28	武庫山ヲ左ニ見テ	武庫山	景

表「見」 その3

番号	年月日	本文	対象	種別
120	元禄4・5・8	龜山目ノ下ニ見ユ	龜山	景
121	元禄4・5・18	左リニ修学院 一条寺 白川 浄土寺村等見	修学院 一条寺 白川 浄土寺村等(遠)	景
122	元禄4・6・9	涼ヲ見テ	京都の川床か?	景
123	元禄4・7・1	岡山ヲ見テ	大阪生野の勝山古墳か。	景
124	元禄4・7・6	雨止 夕日見ル	夕日	景
125	元禄4・7・13	ウチ橋ノ月見ル	月(伊勢宇治橋)	景
126	元禄4・7・13	磯へ出テ見ル	三重県志摩市磯部町の海辺か	景
127	元禄2・5・8	末ノ松山、興井、野田玉川、おもはくの橋、浮嶋等ヲ見廻リ	末の松山、野田の玉川、おもはくの橋、浮嶋	歌枕
128	元禄2・5・10	遠嶋、尾駁ノ牧山眼前也。真野萱原も少見ゆル	遠嶋(牡鹿半島か)、尾駁の牧山、真野萱原	歌枕
129	元禄2・5・14	小黒崎可レ見	小黒崎	歌枕
130	元禄2・7・14	ナゴ、二上山、イハセノ等ヲ見ル	那古、二上山、岩瀬野	歌枕
131	元禄4・4・17	和歌ノ浦ヲ見テ	和歌の浦	歌枕
132	元禄4・4・27	布引瀧ヲ見テ	布引の瀧	歌枕
133	元禄4・4・28	ツノハ松原ヲ見ル	角の松原	歌枕
134	元禄4・5・8	大沢ノ池ヲ見テ	大沢池	歌枕
135	元禄2・4・29	村雪哥仙繪、讚宗鑑之由、見物	雪村歌仙絵	その他
136	元禄2・6・17	熊野権現ノ社へ行、躍等ヲ見ル	踊り	その他
137	元禄4・3・24	木曾寺ノ新庵見ル	木曾寺新庵	その他
138	元禄4・6・11	幻住庵へ行 神主ヲ尋 案内シテ盡ク見	幻住庵	その他
139	元禄4・6・18	東六門 西六門ヲ見テ	御所の門	その他

表「行」「往」 その1

番号	年月日	本文	対象	種別
1	元禄4・4・20	大仙陵へ行	大仙陵	陵墓
2	元禄2・4・27	芹沢ノ瀧へ行	芹沢ノ瀧	名所
3	元禄2・10・	直グニ口やへ行	口や	未詳
4	元禄2・11・	口山へ行	口山	未詳
5	元禄2・6・7	本道寺へも岩根沢へも行也	本道寺、岩根澤	仏
6	元禄2・6・17	皇宮山蛭彌(満)寺へ行	蛭満寺	仏
7	元禄2・8・9	本隆寺へ行テ	本隆寺	仏
8	元禄2・9・2	長禪寺へ行而	長禪寺	仏
9	元禄2・9・10	長禪寺へ行テ	長禪寺	仏
10	元禄4・4・18	粉川寺二行テ	粉河寺	仏
11	元禄4・4・26	明石禪樂寺行	禪樂寺	仏
12	元禄4・5・8	勾当内侍モ此寺行テ	此寺(三宝寺)	仏
13	元禄4・5・17	清水二行	清水寺	仏
14	元禄4・6・9	叡山へ行クヘキノ所	比叡山	仏
15	元禄4・6・10	寂光院へ行	寂光院	仏
16	元禄4・6・17	東向ノ観音開帳を折と行テ見ル	東向観音(開帳)	仏
17	元禄4・6・18	東向へ行	東向観音	仏
18	元禄4・6・28	ソウ持寺へ行	総持寺	仏
19	元禄4・7・8	當麻へ行	当麻寺	仏
20	元禄4・7・8	タル广二行	達磨寺	仏
21	元禄2・3・29	半道り行テ	半道ばかり	道程
22	元禄2・4・21	東ノ方へ行	東の方へ	道程
23	元禄2・4・21	アブクマ河ヲ渡テ行	渡りて行く	道程
24	元禄2・4・29	歩ニテ行バ	歩にて行けば	道程
25	元禄2・4・29	同道ニテ行	同道にて行く	道程
26	元禄2・5・1	一里程行テ	一里程行きて	道程
27	元禄2・5・2	七、八丁行テ	七、八丁行きて	道程
28	元禄2・5・2	山ノ方へ行テ	山の方へ行きて	道程
29	元禄2・5・2	西ノ方へ行	西の方へ	道程
30	元禄2・5・12	兩人共ニ歩行	歩行	道程
31	元禄2・5・14	岩崎ヨリ行バ	岩崎より	道程
32	元禄2・5・17	五、丁行テ	五、六丁	道程
33	元禄2・6・7	少シ行テ	少し	道程
34	元禄2・6・7	シメ斗テ行	注連ばかりにて	道程
35	元禄2・6・18	橋迄行	橋	道程
36	元禄2・6・27	見物テ行	見物して～	道程
37	元禄2・7・3	歩行ス	歩行	道程
38	元禄2・7・4	半道斗行	半道ばかり～	道程
39	元禄2・7・4	二、三町行テ	三丁～	道程
40	元禄2・7・4	出テ行也	出て～	道程
41	元禄2・7・22	未ノ刻ヨリ行	未ノ刻より	道程
42	元禄2・8・9	十丁程行テ	十丁程	道程
43	元禄2・9・3	乍行春老へ寄	～ながら	道程
44	元禄2・10・	コレヨリ同行ス	同行	道程
45	元禄4・4・11	湯へ行	湯へ～	道程
46	元禄4・4・28	西ニ行	西に～	道程
47	元禄4・5・17	芝居へ行	芝居へ	道程
48	元禄4・5・23	芝居ニ行	芝居	道程
49	元禄4・6・26	丹波道ヲ横切行	横切～	道程
50	元禄4・7・1	鳥井ノ南へ行テ	南へ	道程
51	元禄4・7・1	東ノ道ヲ南行	南～	道程
52	元禄4・7・8	越智ヲ右ヲシテ行	「柏原ヲ左ニ越智ヲ右ヲシテ」	道程
53	元禄4・5・11	油小路へ行	油小路	地名(人名?)
54	元禄4・5・29	油小路へ行	油小路	地名(人名?)
55	元禄4・6・16	小川へ行	凡兆宅(小川榎木町)	地名(人名)
56	元禄4・3・11	山口へ行	名古屋山口小牧町(堀部孫兵衛)	地名(人名)
57	元禄4・5・19	小川ニ行	凡兆宅(小川榎木町)	地名(人名)
58	元禄4・5・23	小川へ行テ	凡兆宅(小川榎木町)	地名(人名)
59	元禄4・5・28	小川へ行	凡兆宅(小川榎木町)	地名(人名)
60	元禄4・6・8	小川へ行テ	凡兆宅(小川榎木町)	地名(人名)
61	元禄4・6・19	小川へ行	凡兆宅(小川榎木町)	地名(人名)
62	元禄2・4・20	ハ夕村へ行バ	旗村	地名
63	元禄2・4・20	旗宿へ行	旗宿	地名
64	元禄2・5・2	佐場野へ行	佐場野	地名
65	元禄2・5・2	佐波野、飯坂、桑折ト可行	桑折	地名
66	元禄2・5・11	氣仙へ行トテ	氣仙沼	地名

表「行」「往」 その2

番号	年月日	本文	対象	種別
67	元禄2・5・14	金成へ行	金成	地名
68	元禄2・6・7	モガミへ行也	最上	地名
69	元禄2・6・16	象潟橋迄行而	象潟橋	地名
70	元禄2・6・29	瀬波へ行	瀬波	地名
71	元禄2・7・4	国上へ行道有	国上	地名
72	元禄2・7・14	氷見へ欲レ行	氷見	地名
73	元禄2・7・23	翁ハ雲口主ニテ宮ノ越ニ遊。予、病氣故、	宮ノ越	地名
74	元禄2・8・1	黒谷橋へ行	黒谷橋	地名
75	元禄2・8・12	平田二行	平田	地名
76	元禄2・9・2	大垣為行	大垣	地名
77	元禄2・10・7	上野二行	上野	地名
78	元禄2・10・	桑名二行	桑名	地名
79	元禄2・10・	長嶋行	長嶋	地名
80	元禄2・10・	長嶋町へ行テ	長嶋町	地名
81	元禄4・3・25	二条へ行	二条	地名
82	元禄4・4・8	大坂へ行道有	大阪	地名
83	元禄4・4・8	ミ山村へ行也	奈良御山村	地名
84	元禄4・4・17	カダへ行テ	加太	地名
85	元禄4・5・5	大和やへ行テ	大和屋(麩屋町旅宿)	地名
86	元禄4・5・8	太秦へ行テ	太秦	地名
87	元禄4・5・14	東山二行	東山	地名
88	元禄4・5・18	岩倉へ行	岩倉	地名
89	元禄4・5・18	花園村二行	花園村	地名
90	元禄4・6・12	大津へ行 左ノ方	大津	地名
91	元禄4・6・14	苅やへ行	麩屋町	地名
92	元禄4・6・21	二条へ行	二条	地名
93	元禄4・7・9	立田へ行	立田	地名
94	元禄4・7・9	立野へ行	立野	地名
95	元禄4・6・11	幻住庵へ行	幻住庵	その他
96	元禄4・6・7	養元へ行ク	養元(未詳)	人名?
97	元禄2・4・28	彼宅へ行	宅(矢内彦三郎)	人名
98	元禄2・7・25	山王神主藤井伊豆宅へ行	藤井伊豆(小松日吉神社神官)	人名
99	元禄2・8・15	小寺氏へ行	小寺五郎左衛門	人名
100	元禄2・8・16	玄忠へ行	森恕庵玄忠(「玄忠」)	人名
101	元禄2・9・7	翁、八良左へ被行	藤田八郎左衛門(排号蘭夕)	人名
102	元禄2・11・9	源右殿へ行	河合源右衛門	人名
103	元禄4・4・2	市左へ行	市左衛門	人名
104	元禄4・4・30	允昌二行	凡兆	人名
105	元禄4・5・6	田中氏へ行テ	田中式如	人名
106	元禄4・5・6	允昌へ行	凡兆	人名
107	元禄4・5・14	中村荒右へ行	史邦	人名
108	元禄4・5・28	淡州公へ行	淡州公	人名
109	元禄4・6・2	直庵へ行	直庵	人名
110	元禄4・6・2	中村へ行	史邦(「中村」)	人名
111	元禄4・6・13	翁大津方帰玉ヲ所へ行	翁(大津より帰りたまふ所へ)	人名
112	元禄4・6・13	田中へ行テ	田中式如	人名
113	元禄4・6・14	中村へ行テ	史邦(「中村」)	人名
114	元禄4・6・19	中村二行	史邦(「中村」)	人名
115	元禄4・6・21	中村へ行テ	史邦(「中村」)	人名
116	元禄4・7・19	小芝へ行	小芝	人名
117	元禄4・7・19	安子へ行テ	安田左五左衛門か?(「安子」)	人名
118	元禄4・7・21	森氏へ行	森恕庵玄忠(「森氏」)	人名
119	元禄4・7・23	森氏へ行テ	森恕庵玄忠(「森氏」)	人名
120	元禄4・7・23	安田へ行	安田左五左衛門(「安田」)	人名
121	元禄2・5・13	タツコクガ岩ヤへ不行	達谷ヶ窟	古跡
122	元禄4・3・28	フルノ瀧へ行	布留の瀧	古跡
123	元禄2・3・29	室ノ八嶋へ行	大神神社	神
124	元禄2・4・21	かしまへ行	白河鹿島神社	神
125	元禄2・6・17	熊野権現ノ社へ行	象潟熊野権現	神
126	元禄4・4・17	御旅所二行	和歌山東照宮御旅所	神
127	元禄4・4・17	日前へ行	日前宮	神
128	元禄4・5・5	稲荷三行	伏見稲荷	神
129	元禄4・5・27	北野へ行	北野天満宮	神
130	元禄4・6・2	北野へ行	北野天満宮	神
131	元禄4・6・6	北野へ行	北野天満宮	神
132	元禄4・6・8	北野へ行テ	北野天満宮	神

表「行」「往」 その3

番号	年月日	本文	対象	種別
133	元禄4・6・13	北野へ行	北野天満宮	神
134	元禄4・7・6	天ノ河弁才天へ行	天ノ河弁才天	神
135	元禄2・9・3	木因ニ會、息弥兵ヘヲ呼ニ遣セドモ不行	谷木因宅俳座	会合
136	元禄2・9・3	越人着故、コレハ行	谷木因宅俳座	会合
137	元禄2・9・4	源兵へ、會ニ而行	左柳(大垣藩士浅井源兵衛)での会合	会合
138	元禄2・5・4	三ノ輪、笠嶋と村並而有由行過テ	箕輪、笠島	歌枕
139	元禄2・5・7	木の下へ行	木の下	歌枕

番号	年月日	本文	対象	種別
1	元禄2・7・29	道明測、予、不往	道明が測	古跡
2	元禄4・6・23	中村へ往	史邦(「中村」)	人名
3	元禄2・7・14	氷見へ欲行、不往	氷見	地名
4	元禄4・6・24	糺へ往	糺	地名
5	元禄4・6・28	箕面へ往	箕面	地名
6	元禄4・6・28	大坂ニ往	大阪	地名
7	元禄4・6・29	堺ヘモ往シ也	堺	地名
8	元禄4・6・23	小川往	凡兆宅(小川樫木町)	地名(人名)
9	元禄2・8・8	十丁程往テ	十丁程	道程
10	元禄4・7・3	上太子ニ往	叡福寺	仏
11	元禄4・7・3	觀修寺ニ往テ	勸修寺	仏
12	元禄4・7・2	道明寺ニ往道	道明寺	仏(地名)

表「至」「到」

番号	年月日	本文	対象	種別
1	元禄2・6・8	和交院御入、申ノ刻ニ至ル	申の刻	時刻
2	元禄2・6・9	申刻ニ至ル	申刻	時刻
3	元禄2・7・6	夜ニ至テ	夜	時刻
4	元禄2・8・14	南宮ニ至テ拜ス。	南宮大社	神
5	元禄4・6・28	生玉ニ至ル	生玉魂神社	神
6	元禄2・6・10	本坊ニ至テ、蕎切、茶、酒ナド出	羽黒山本坊	神(場所)
7	元禄4・5・18	木船ニ至ル 十町斗前ニ蜚岩有 本社ヲ	貴船神社	神(地名)
8	元禄2・10・	荷兮ニ至ル	荷兮	人名
9	元禄4・6・11	乙州へ寄 故障有テ 翁夜前ニ 此ニ至ル	此(乙州)	人名
10	元禄2・6・10	長山五良右衛門宅ニ至ル	長山五良右衛門宅	人名(場所)
11	元禄2・4・2	大渡リト云馬次ニ至ル	大渡馬継	地名
12	元禄2・4・16	高久ニ至ル	高久	地名
13	元禄2・5・14	一ツ栗ト云村ニ至ル	一ツ栗	地名
14	元禄2・6・3	清川ニ至ル	清川	地名
15	元禄2・6・6	角兵衛小やニ至ル	角兵衛小屋	地名
16	元禄2・6・6	月山ニ至	月山	地名
17	元禄2・7・1	乙村ニ至ル	乙村	地名
18	元禄2・7・5	至柏崎ニ	柏崎	地名
19	元禄2・7・5	至鉢崎	鉢崎	地名
20	元禄2・7・8	至高田ニ	高田	地名
21	元禄2・7・13	入善ニ至テ	入善	地名
22	元禄2・7・13	泊ニ至テ	泊	地名
23	元禄2・8・7	金津ニ至ル	金津	地名
24	元禄2・8・8	府中ニ至ル	府中(福井)	地名
25	元禄2・8・9	金ヶ崎へ至ル	金ヶ崎	地名
26	元禄2・8・12	長濱ニ至ル	長濱	地名
27	元禄2・8・12	彦根ニ至ル	彦根	地名
28	元禄2・8・13	関ヶ原ニ至テ	関ヶ原	地名
29	元禄2・8・14	大垣ニ至ル	大垣	地名
30	元禄2・9・15	小幡ニ至テ	小幡	地名
31	元禄2・9・15	至テ津ニ	津	地名
32	元禄2・9・16	上野ニ至。	上野(津)	地名
33	元禄2・9・16	神戸ニ至ル	神戸(鈴鹿)	地名
34	元禄2・9・27	長嶋ニ至ル	長嶋	地名
35	元禄2・10・6	至亀山	亀山	地名
36	元禄2・10・	庄野ニ至テ	庄野(三重)	地名
37	元禄4・4・17	力夕ニ至テ	加太	地名
38	元禄4・4・29	久我ニ至	久我	地名
39	元禄4・5・5	伏見ニ至ル	伏見	地名
40	元禄4・5・8	廣沢ニ至ル	広沢	地名
41	元禄2・9・23	山口ニ至ル	名古屋山口小牧町(堀部孫兵衛)	地名(人名)
42	元禄2・10・	山口ニ至テ	名古屋山口小牧町(堀部孫兵衛)	地名(人名)

番号	年月日	本文	対象	分類
1	元禄4・4・16	戌剋ニ到ル	戌剋	時刻
2	元禄4・4・17	東照宮ノ前ニ到テ御旅所ニ行	和歌山東照宮	神
3	元禄4・7・3	水分ニ到 三良兵へヲ尋	水分神社	神(地名)
4	元禄2・9・11	堤ぞに到テ	堤ぞこ	人名
5	元禄2・4・29	郡山ニ到テ	郡山	地名
6	元禄2・5・1	福嶋へ到テ	福島	地名
7	元禄2・6・15	吹浦ニ到ル	吹浦	地名
8	元禄2・6・28	到葡萄	葡萄峠	地名
9	元禄4・4・16	湯浅ニ到	湯浅	地名
10	元禄4・4・17	岩山ニ到テ	和歌山	地名
11	元禄4・7・5	洞村ニ到	洞村	地名
12	元禄4・7・9	鴨ニ到ル	加茂	地名
13	元禄4・7・12	ヒサヒニ到ル	久居	地名
14	元禄4・7・17	到津ニ	津	地名
15	元禄4・7・17	桑名ニ到ル	桑名	地名
16	元禄2・9・6	大智院へ到	大智院	仏
17	元禄4・7・3	金剛山峯ニ到	金剛山	仏
18	元禄4・7・5	山上ニ到	大峯山寺	仏

表「趣」

番号	年月日	本文	対象	種別
1	元禄2・10・9	小川次郎兵へニテ会有テ昼時方趣	小川次郎兵衛	会合
2	元禄2・4・21	かしまにて連哥有時、難句有之。いづれも三日付ル 不成。宗祇、旅行ノ宿ニテ被聞之て、其所へ被趣	白河鹿島神社	神
3	元禄2・6・7	湯殿へ趣	湯殿山	神
4	元禄2・8・10	上宮趣	常宮神社	神
5	元禄4・3・25	北野二趣	北野天満宮	神
6	元禄4・4・17	粟嶋へ趣	加太淡嶋神社	神
7	元禄4・5・1	賀茂へ趣	上賀茂神社か	神
8	元禄4・5・5	藤森へ趣	藤森神社	神
9	元禄4・5・16	北野へ趣	北野天満宮	神
10	元禄4・5・19	北野へ趣	北野天満宮	神
11	元禄4・5・21	北野へ趣	北野天満宮	神
12	元禄4・5・29	祇園へ趣	八坂神社	神
13	元禄4・6・15	北野へ趣	北野天満宮	神
14	元禄4・6・29	住吉へ趣	住吉大社	神
15	元禄4・5・18	木船二趣	貴船	神(地名か)
16	元禄2・4・2	太田原へ趣	太田原	地名
17	元禄2・5・13	平泉へ趣	平泉	地名
18	元禄2・5・27	山形へ趣	山形	地名
19	元禄2・5・28	天童二趣	天童	地名
20	元禄2・6・13	坂田二趣	酒田	地名
21	元禄2・6・15	象潟へ趣	象潟	地名
22	元禄2・6・19	江戸へ被趣ニ因テ	江戸	地名
23	元禄2・6・27	翁八馬ニテ直ニ岸ヶ関被趣	念珠ヶ関	地名
24	元禄2・8・5	大正侍二趣	大聖寺	地名
25	元禄2・8・9	木ノ芽峠二趣	木ノ芽峠	地名
26	元禄2・8・9	色濱へ趣	色の浜	地名
27	元禄2・8・12	鳥本二趣	鳥居本	地名
28	元禄2・9・23	江戸二趣	江戸	地名
29	元禄2・10・6	イ力趣	伊賀	地名
30	元禄4・3・13	長嶋へ趣	長島	地名
31	元禄4・3・24	京二趣	京	地名
32	元禄4・3・26	宇治二趣	宇治	地名
33	元禄4・3・27	南都二趣	奈良	地名
34	元禄4・4・29	京二趣	京	地名
35	元禄4・5・2	サカへ趣	嵯峨	地名
36	元禄4・5・4	久我二趣	久我	地名
37	元禄4・5・6	談合谷二趣	談合谷	地名
38	元禄4・6・1	白河二趣	白河	地名
39	元禄4・6・10	エイ山へ趣	比叡山(大まかに方向を指すか)	地名
40	元禄4・6・10	大津二趣	大津	地名
41	元禄4・6・25	翁も大津へ趣故	大津	地名
42	元禄4・7・8	畝傍二趣	畝傍	地名
43	元禄4・7・14	磯部へ趣	磯部	地名
44	元禄2・9・26	山口趣	名古屋山口小牧町(堀部孫兵衛)	地名(人名)
45	元禄2・10・	山口へ趣	名古屋山口小牧町(堀部孫兵衛)	地名(人名)
46	元禄4・5・14	小川三趣	凡兆(「小川」)	地名(人名)
47	元禄4・7・11	小川へ趣	凡兆(「小川」)	地名(人名)
48	元禄4・4・22	船二趣	船	道程
49	元禄2・5・27	立石寺へ趣	立石寺(方向か)	仏
50	元禄2・8・5	那谷へ趣	那谷寺(方向か)	仏
51	元禄4・5・6	黒谷二趣テ	黒谷	仏(地名?)
52	元禄4・5・20	黒谷へ趣	黒谷	仏(地名?)

表「尋」

番号	年月日	本文	対象	種別
1	元禄4・6・18	霞谷ヲ尋	霞谷	歌枕
2	元禄2・4・20	古関を尋て	白河古関	古跡
3	元禄4・5・5	城山ヲ尋テ	伏見山か	古跡
4	元禄4・6・12	長明石ヲ尋	長明石	古跡
5	元禄4・6・18	大文字やヲ尋テ	大文字屋(未詳)	宿
6	元禄4・6・14	ソノカヲ神ヲ尋テ不求	園韓神社	神
7	元禄2・4・21	中町左五左衛門を尋	左五左衛門(未詳)	人名
8	元禄2・5・1	神尾氏ヲ尋	神尾庄衛門	人名
9	元禄2・5・5	三千風尋ル	大淀三千風	人名
10	元禄2・5・10	四兵へと尋	石巻旅籠・沼倉四兵衛	人名
11	元禄2・5・10	四兵ヲ尋テ	石巻旅籠・沼倉四兵衛	人名
12	元禄2・6・12	圓入(近江飯道寺不動院ニテ可尋)	圓入(近江飯道寺僧)	人名
13	元禄2・6・16	佐々木孫左衛門尋テ	佐々木孫左衛門	人名
14	元禄2・7・1	喜兵、太左衛門、彦左衛門、等尋	菱田喜兵衛(村上藩士)・友兵・彦左衛門	人名
15	元禄2・7・1	次作ヲ尋	次作(未詳)	人名
16	元禄2・7・8	池田六左衛門ヲ尋	池田六左衛門(未詳)	人名
17	元禄2・7・8	春庵ヨリ状来ル。而尋	春庵細川棟雪	人名
18	元禄2・8・10	出雲や弥市良へ尋	出雲屋弥市郎	人名
19	元禄2・8・11	五良右衛門尋テ	天屋五郎右衛門	人名
20	元禄2・8・14	不破修理ヲ尋テ	不破修理(南宮大社神官)	人名
21	元禄2・8・14	如行ヲ尋	如行	人名
22	元禄2・9・12	長左へ尋テ	長左(未詳)	人名
23	元禄2・9・13	小柴土((難読))やヲ尋テ	小芝、口や(土やカ)	人名
24	元禄2・9・13	岡本岩出口太夫ヲ尋テ	岡本、岩出口太夫	人名
25	元禄2・9・23	為丸ヲ尋	長岡為麿	人名
26	元禄2・9・23	荷兮ヲ尋	荷兮	人名
27	元禄2・9・27	藤七ヲ尋テ	藤七(未詳)	人名
28	元禄2・10・25	辰巳市門((工門))ハハ下ノ宿へ尋	辰巳市右衛門	人名
29	元禄4・3・24	田中氏ヲ尋テ	田中式昭	人名
30	元禄4・3・25	カセイヲ尋	凡兆	人名
31	元禄4・3・25	カセイヲ尋テ	凡兆	人名
32	元禄4・3・26	宮地氏ヲ尋テ	宮地(未詳)	人名
33	元禄4・3・28	翁ヲ尋ル	芭蕉	人名
34	元禄4・4・5	是及ニ尋ル	是及(未詳)	人名
35	元禄4・4・20	山口常春ヲ尋	山口常春(未詳)	人名
36	元禄4・4・21	桜井氏尋	桜井氏(未詳)	人名
37	元禄4・4・29	大綱氏へ尋テ	大綱氏(未詳)	人名
38	元禄4・4・30	田中氏ヲ尋テ	田中式昭	人名
39	元禄4・5・6	主水ヲ尋テ	主水(未詳)	人名
40	元禄4・5・23	高田氏ヲ尋	高田氏(未詳)	人名
41	元禄4・5・28	田中へ尋	田中式昭	人名
42	元禄4・5・29	深井数右を尋	深井数右衛門(未詳)	人名
43	元禄4・6・11	膳所孫工門へ尋テ	水田正秀	人名
44	元禄4・6・11	神主ヲ尋	幻住庵神主	人名
45	元禄4・6・21	大工甚工門ヲ尋テ	大工甚衛門	人名
46	元禄4・6・27	山崎川原へ尋テ	川原崎氏か	人名
47	元禄4・7・1	桜井尋	桜井氏(未詳)	人名
48	元禄4・7・1	チカンヲ尋テ	未詳・人名と推定	人名
49	元禄4・7・3	三良兵へヲ尋	三郎兵衛(未詳)	人名
50	元禄4・7・13	十之助ヲ尋テ	十之助(未詳)	人名
51	元禄4・7・18	小芝 森へ尋	森恕庵玄忠由軒	人名
52	元禄4・4・1	廣橋へ尋テ	広橋	地名
53	元禄4・6・10	本福寺ヲ尋テ	本福寺(長等)	仏
54	元禄4・7・22	安田大智院へ尋	大智院	仏

注

一九七九

(一) 上野洋三『芭蕉論』(筑摩書店、一九八六)二二五七ページ。

(二) なお本稿の主旨は右の上野洋三氏の論文と同様のものではあるが、執筆の直接的動機は、俳文藝研究会に於いて、『近畿巡遊日記』の輪講が行なわれた際の話題に拠っている。

本論で挙げた神仏待遇表現が隣接している箇所は、元禄二年よりも元禄四年に於て顕著であることから、おそらく神仏に対する表現について話題に出たのだと思われる。

(三) なお他に可能性としてありうる文字として「伺」は使用が認められなかった。

(四) 以下一覽表をもとに論を進めてゆくの、一応表の項目について簡単に説明する。

「年月日」の項での「二」「四」は、元禄二年と、元禄四年の別である。

「原文」は今回考察対象とする語について、その対象が分りやすいよう、主に先行語句を掲出した。なお新旧の字体の別には特に意味は無い。

「対象」は分る限り掲出したが不明なものも存在する。「対象」の記述につき、元禄二年に関しては次の書物に負っている。

『新版おくのほそ道』 頼原退蔵・尾形仿訳注、角川文庫、一九七五

『詳考 奥の細道 増訂版』 阿部喜三男・久富哲雄、日栄社、

『おくのほそ道』、萩原恭男校注、岩波文庫、一九七九

『校本芭蕉全集』 第六卷、富士見書房、一九八九

また元禄四年に関しては俳文藝研究会の輪講に基づいている。最後に「別」の項目については最も注意しなければならない

ことを述べる。ここは対象について神仏等の別を記したものであるが、あくまでも便宜的なものでしかない。当時は神仏習合の時代であり、神とも仏ともつかない、或いは神でもあり仏でもある場合が少なくないからである。本稿中でも取り上げている東照宮も然りであろう。本稿では東照宮は便宜的に「神」とした。

対象について更に調査をすれば、神から仏に、或いはその逆に認識をあらためなければならぬ可能性もある。これは本稿にとつては重要な差違ではあるが、それでも本稿の結論は大きくは動かないだろうとは考えている。

(五) 上野氏前掲書、二五八ページ。

(六) ここは「東照宮ノ前ニ到テ御旅所ニ行御祭ヲ拝ム」のように記されており、神前に「詣でた」というよりは、その目的が祭礼にあつたため、東照宮のおそらくは社殿や御旅所が、言わば地名のように扱われているのではないかと思われる。

(七) 「赴」の字は確認できなかった。

(八) 北野天満宮に対して、元禄四年の五月八日、同九日、六月十

八日、同二十二日、同二十五日に「帰」と記していることが、その証左となろう。

なお既に右の注(二)でもふれたが、本稿をこのような視点で書くことになった経緯について、私事で恐縮ながら最後に少し申し上げたい。

俳文学者の故井本農一博士が私的に興し、主宰なさった俳文藝という研究会があった。筆者はその警咳に接することは叶わなかったが、井本博士が亡くなった後も、諸先生方が研究誌の刊行を伴わない形ながら会合はお続けになり、筆者もその末席に連なることができた。その会に於て『近畿巡遊日記』の輪講をしていた際、神社を訪れる時と寺を訪れる時とは曾良の表現が異なるとお話を、久富哲雄博士や村松友次博士から拝聴した覚えがあった。本稿の直接的な執筆の動機は、この経験に端を発している。

久富、村松両先生も既に白玉楼中の人となって久しい。報いること能わずながら、この場を借りて学恩に感謝申し上げる。

The Survey of the difference of the expressions between for temples and for shrines in Travel Diary written by KAWAI Sora in 1689 and 1691.

AIZAWA, Hirokazu

This paper is intended to show the difference of the expressions between for temples and for shrines in Travel Diary written by KAWAI Sora in 1689 (Genroku 2) and 1691 (Genroku 4).

The travel in 1689 is famous of Oku no Hosomichi (Narrow Road to the Deep North). Basho, the author of Oku no Hosomichi, went to the Deep North accompanied by Sora who wrote the simple but detailed diary called as like Sora's Travel Diary or Sora's Attendant Diary etc. And after two years, in 1691 Sora also wrote the another travel diary that he traveled alone around Kinki region, which is called as like Diary of Toured in Kinki etc.

Sora visited many temples and shrines in his both travels, and he is said to have been a Shintoist. It is conceivable that he used honorific words or expressions for the shrines he visited. Then this paper extracts the honorific words or expressions from his travel diaries, meaning "visit to pray" or "worship": 拜 (ogamu or hai), 参 (mairu or san), 詣 (moudzu or kei), and verifies that these words or expressions are mainly used for the shrines rather than the temples.